



澤田正昭さん

東京を出て近鉄奈良駅に降り立った。プラットホームは木製の栈橋ふうで、それはまだ地上に出ていた。東文研の関野克先生と一緒にいた。多分、先生は所用があつて、ついでに、4月から奈文研にお世

話になる私を連れて来てくださったのだろう。春日野の研究所本部でご挨拶をした後、ライトバンに乗せてもらい、バラック街さながらの平城砦に着いた。田圃のど真ん中にポツンとその一角をなしていたので、そう思えた。そこは平城宮跡発掘調査部、その拠点だった。拠点の案内人は、黒セーターの端正な顔立ちの男性だった。その人は町田章現所長だった。入所後のほとんどの期間を町田さんの直属で過ごしたのも深いご縁を感じる。発掘の成果、保存科学的な問題点を中心にご案内いただいた。

管内を一回りしたところでちょうどお昼時となった。帰ろうとして、事務所にご挨拶に伺ったら、優しそうな眼鏡の先生が「昼飯を食べていきなさい！」と親しげに声をかけてくださった。これから仲良くしていただくためにはそれもいいかと、食堂という名のプレハブ小屋についていった。30人くらいがいっせいに昼食をとる。家族的でほほえましい光景だった。座席を確保したところで、ふと、入籍したばかりのわが妻をひそかに外に待たせていたことを思いだした。今さら帰るというわけにもいかず、わけを話した。「オーッ！連れて来い！」。親睦をモットーにしている私は、妻と二人で昼飯をごちそうになった。ネギがたっぷり入ったみそ汁がおいしかった。やさしい先生は狩野久さんだった。何とも厚かましい新人である。その年の7月には、調査部の同僚3人と共に結婚のお祝いをしていただいた。恒例のチョンガー惜別の洗札を受けるのが慣わしだったからだ。洗札のようすを書く余裕は無いが、激しくも思い出深いパーティだった。

あつという間の34年間でした。楽しい思い出ばかりが脳裏をかすめる今日この頃です。奈文研に、そして先輩・同僚のみなさまに心からの感謝を申し上げる次第です。ありがとうございました！！

(埋蔵文化財センター長 澤田正昭)

退官に寄せて

初めて奈文研に来た日

1969年の3月下旬、ポカポカ陽気のその日、私は